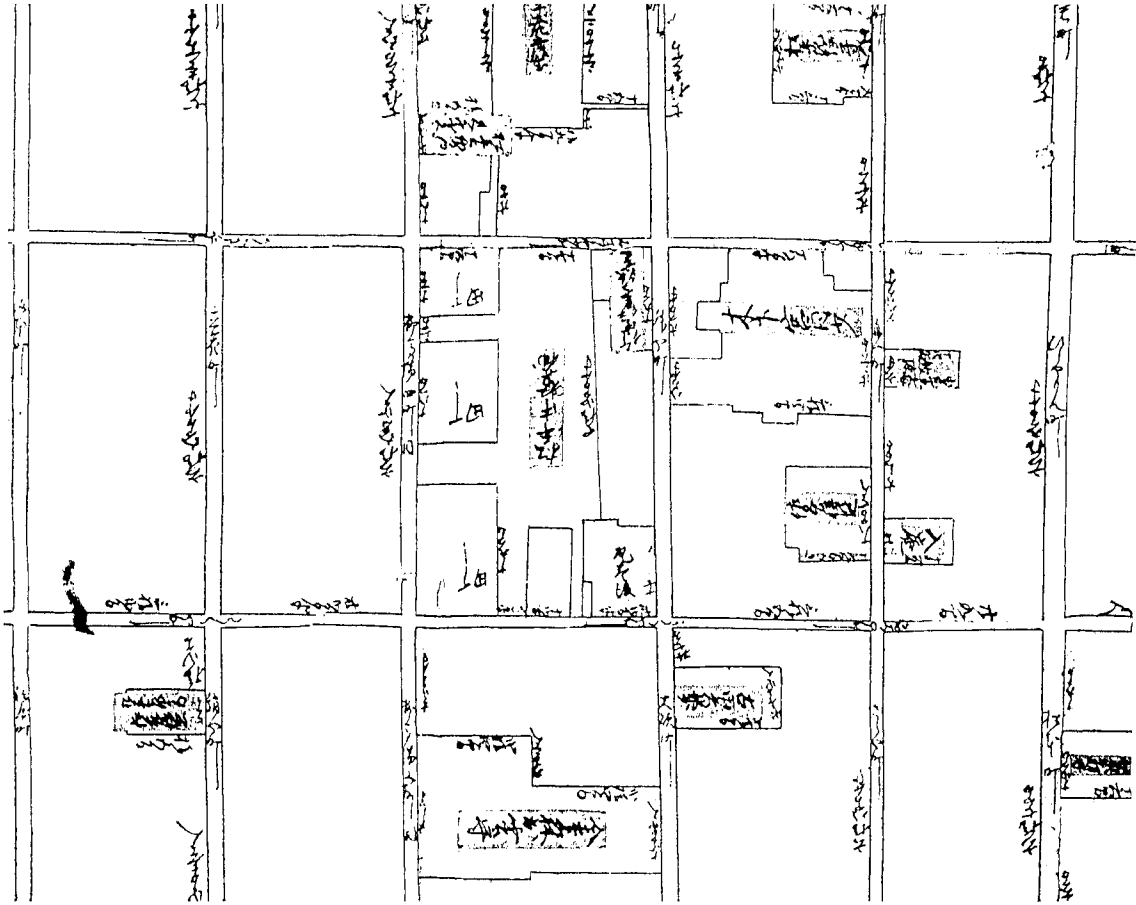


京都地方・簡易裁判所発掘調査
現地説明会資料



『洛中絵図』に描かれた調査地周辺の様子

1998年8月22日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

京都地方・簡易裁判所の発掘調査

場 所	京都市中京区柳馬場通丸太町下る四丁目
期 間	1997年10月～継続中
調査面積	1区：約1800㎡ 2区：約1800㎡
調査主体	(財)京都市埋蔵文化財研究所

1. 調査の経過

今回の調査は、裁判所の建替え工事に伴う発掘調査です。遺跡があることが分かっている場所で工事を行う時には、それぞれの時代の遺跡の調査をすることになっています。発掘調査は敷地南西側の1区と北側の2区の二つに分けてすすめています。1区の調査は昨年10月から今年6月まで行いました。2区の調査は4月から取り掛かっています。

2. 調査地周辺の歴史

平安京が造られる前、調査地南側・御所南小学校の調査で古墳時代から飛鳥時代（約1700～1300年前）の川の跡が発見されました。また、烏丸丸太町南西角の調査では古墳時代の住居跡も見つかっており、この周辺に集落があったことをたしかめています。

平安時代（約800～1200年前）、調査地は平安京の一部でした。北側を春日小路（現在の丸太町通）・西側を万里小路（現在の柳馬場通）・南側を大炊御門大路（現在の竹屋町通）・東側を富小路（現在の富小路より東側）に囲まれたこの区画は、当時の地名表記の方法では左京二条四坊十町にあたります。この地には平安時代後期から鎌倉時代にかけて（約700～900年前）白河法皇・後鳥羽上皇らの御所となった「春日殿（大炊御門殿）」があったことが記録に残っています。

室町時代（約400～700年前）の調査地周辺についてはよく分かっていませんが、室町時代中頃（約600年前）には、ここに室町幕府の要人であった畠山持国邸があったといわれています。

桃山時代（約400年前）になると豊臣秀吉が京都の町を改造します。富小路が現在の場所に造られたのもこの頃です。江戸時代前期（約300～400年前）には、調査地に松平中務少輔の屋敷があったことが『洛中絵図』に描かれています。江戸時代中期から後期（約300～130年前）には、近隣と同様の町家が建ち並んでいた様です。

3. 1区の調査

1区では遺跡の上に約1mの厚さで裁判所の建物の盛土が残っており、一部は建物の基礎によって壊されていました。東部には大きな基礎が残って並んでいます。調査は4面に分けて行ないました。

第1面（江戸時代中期から後期：約300～130年前）の調査では、建物の柱穴・井戸・石組遺構・かまど・ごみを処理した穴などが見つかりました。丸くて大きな穴はほとんどが井戸の跡です。また、長方形や楕円形の大きな穴の多くはごみを処理した穴と考えられ、茶碗・皿などの食器、壺・甕などの貯蔵器、屋根瓦などがたくさん出土しました。かまどは調査区南部で1基見つかりました。半円形に赤く焼けた土が残り、内側には真っ白な灰が積っていました。石組遺構には直径1m未満の小型のものから、深さが2m近くもあるものまでいろいろな形が見られます。形によって使い分けられていたはずですが、用途はよく分かりません。柱穴も多く見つかりましたが、壊されている部分が多いため建物の間口や奥行きを復元することができません。しかしながら、一部で敷地境の低い石垣や土間に貼った土が残っていたので、通庭のある町家が建ち並んでいたと想像できます。

第2面（室町時代後半から江戸時代前期：約600～300年前）の調査では、建物の柱穴・塀・石室・ごみを処理した穴などが見つかりました。塀は南北方向・東西方向それぞれ1基ずつあり、柱を据えた礎石が一行に並んでいました。特に東西方向の塀は『洛中絵図』によると松平家の屋敷と町家の境界付近にあたっています。石室は石を方形に積み上げて作ったもので、地下式の貯蔵施設と考えています。ごみを処理した穴は調査区中央部に多く、大きな穴を何度も掘り直して陶磁器や瓦などを捨てていました。また、調査区北部には浅い穴に握りこぶしほどの大きさの石を乱雑に入れてありました。仮に「石敷」と呼んでいますが、機能は分かりません。

第3面（平安時代後期から室町時代前半：約900～600年前）の調査では、建物の柱穴・塀・井戸・瓦だめ・ごみを処理した穴などが見つかりました。塀は調査区東端で南北方向に延びていました。調査区北部の井戸は室町時代に属し、方形に板を組んで井戸枠を作っていた痕跡が残っていました。底までの深さは当時の地表面から約3mあります。瓦だめからは平安時代後期の屋根瓦がまとまって出土しました。「春日殿」との関連が注目できます。

第4面（飛鳥時代から平安時代中期：約1400～600年前）の調査では、建物の柱穴・井戸・地鎮・溝・ごみを処理した穴・流路などが見つかりました。調査区中央部の井戸は平安時代前期のもので、方形に板を組んで井戸枠を作っていた痕跡が残っていました。底の

部分には隅の柱の下に小さな穴が掘ってあり、中から2枚重ねの状態かんで土師器の椀が出土しました。そのうちのひとつには底部外面に「在」と墨で書いてあります。また、少し横の浅い穴からは須恵器の蓋が出土しました。井戸を作るときの祭祀の跡と考えられ、注目されます。調査区北部でも小さな穴に完形の土師器の小皿を3枚以上重ねて埋納した地鎮遺構があります。調査区東部には東西方向の浅い溝があり、区画の機能を果たしていたと考えられます。また、平安時代の整地層の下には南北方向の流路がありました。1区では最も古い遺構で、飛鳥時代を中心とする遺物が出土しました。

4. 2区の調査

2区も遺跡の上に約1mの厚さで裁判所の建物の盛土が残っていました。現在、第1面（江戸時代：約400～130年前）の調査を行っており、塀・建物の柱穴・井戸・塼列建物せんれつたてもの・土蔵・かまど・埋甕うめかめ・石室・石組遺構・ごみを処理した穴などが見つかっています。

調査区西部と東部には南北方向の塀があります。約1.0～1.2mの間隔で柱を据えた礎石が並び、それぞれ調査区外に延長します。西部の塀にはほぼ直角に別の塀も取り付いています。これらの塀の位置は『洛中絵図』に描かれた区画の位置にほぼ一致していることから、東西の塀に挟まれた部分はさが『洛中絵図』にある松平中務少輔の屋敷、外側が町家部分と推定できます。また、西部の塀では柱穴が多数切り合っていることから、この区画に沿って塀が何度も作り替えられたことを示しています。

屋敷内では多数の柱穴が見つっていますが、数が多いこともあって、建物の復元はできていません。東部の塀に沿って塼列建物（塼列建物とは地面を四角く掘り下げた部分の壁に塼という瓦状の平たい焼き物を張り並べた建物のことです）があります。今回見つかった塼列建物は東西約4.5m・南北約18.0mの長大なもので、塼のかわりに平瓦を用いています。南半分には礎石も並んでいます。蔵くらのような収蔵施設であったと考えられます。一方、西部の塀の近くには土が赤く焼けた部分があるので、これをかまどと考えると台所に相当する建物があったと推定できます。南側に少し離れたところには井戸も見つかっています。さらに調査区南端近くには石組遺構がありますが、この用途はまだ分かっていません。

西部の塀の外側にも柱穴がありますが、建物の復元はできていません。塀の近くには一辺約2.5mの大きさで石を積み上げた石室があります。石積みは2段目までしか残っていませんが、本来は地表まで積み上げられていたはずで、今でいう地下収蔵庫として用いられたものです。近くには穴を掘って大きな甕を据え付けた埋甕もあります。また、南北

方向にほぼ同じ間隔で石組遺構が並んでいます。石組遺構は一辺約1m位の大きさと、握りこぶし程の大きさの石を積み上げています。用途は不明ですが、これらの施設が一軒の家々ごとに備わっていたとすると、柳馬場通に面した間口の狭い町家が並んでいたことが推定できます。

東部の塀の外側は後世の攪乱が深くまで及んでいるため、よく分かりません。中ほどにはL字形に握りこぶし程の石が並んでいます。これは土蔵の基礎の一部が残ったものです。土蔵の壁の部分の地下は、このように石と粘土を交互に積み上げて地盤を強化していました。土蔵の南側にも石組遺構があります。そのうちの1基はぎっしりと丸い石を詰め込んでおり、排水処理施設の可能性があります。

これらのほか、調査区全域に色々な形の大きな穴があいていますが、それらの多くはごみを処理した穴です。陶磁器類を中心として、土器・瓦・砥石^{といし}などの石製品・釘などの鉄製品・金具などの銅製品・貝殻などの食べ物カスなど様々な遺物が出土しています。

5. まとめ

今回の調査の大きな成果としては、江戸時代前期の武家屋敷の跡が比較的良好な状態で見つかったことがあげられます。収蔵施設と考えられる塙列建物や台所など生活にかかわる施設の様子が分かってきました。京都市内には桃山時代の聚楽第^{じゅらくだい}周辺や伏見城城下町など大名屋敷が集中する地域があり、多数の調査が行われていますが、京都の市街地各所に点在する江戸時代の武家屋敷についてはよく分かっていません。今回の調査はその実態を解明する手掛かりになることでしょう。

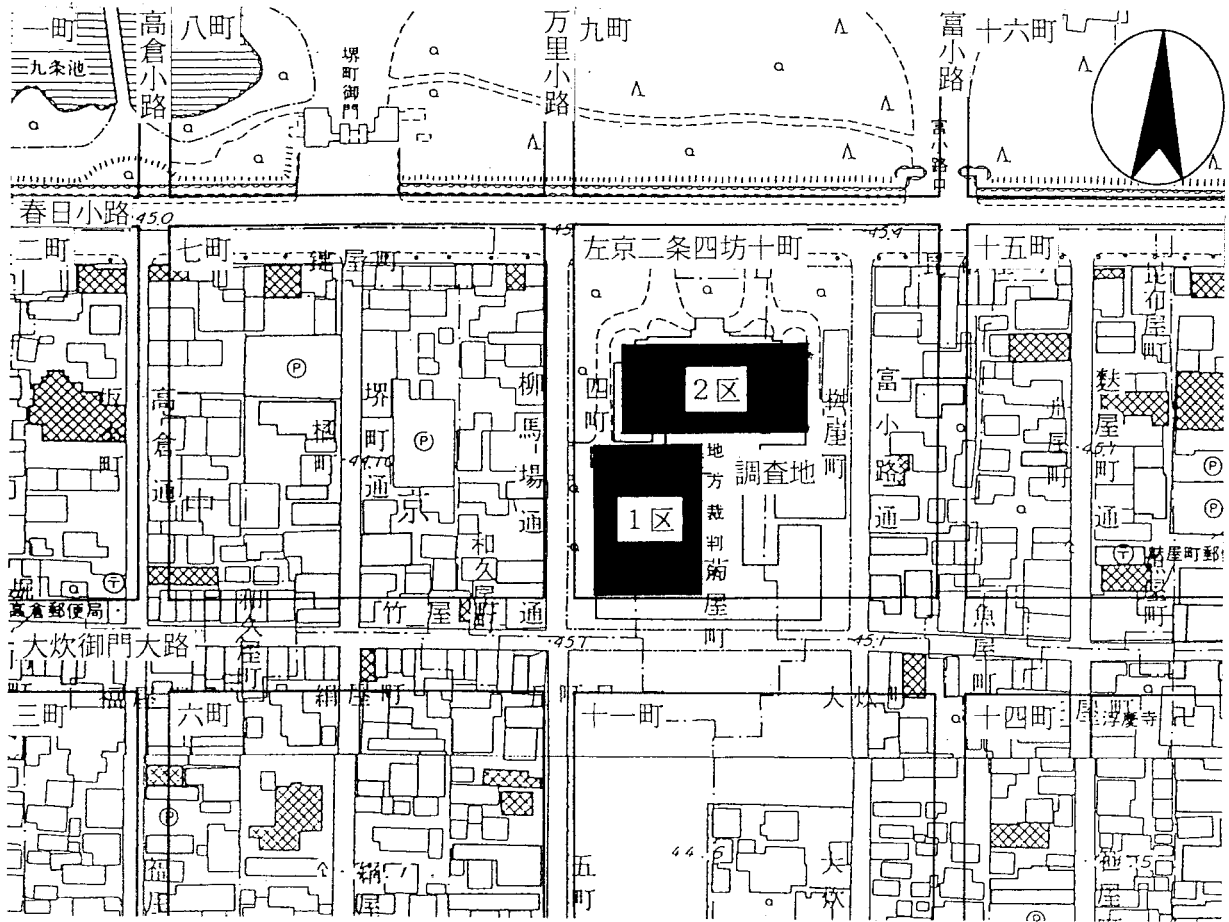


図1 調査位置図 (1/2500)

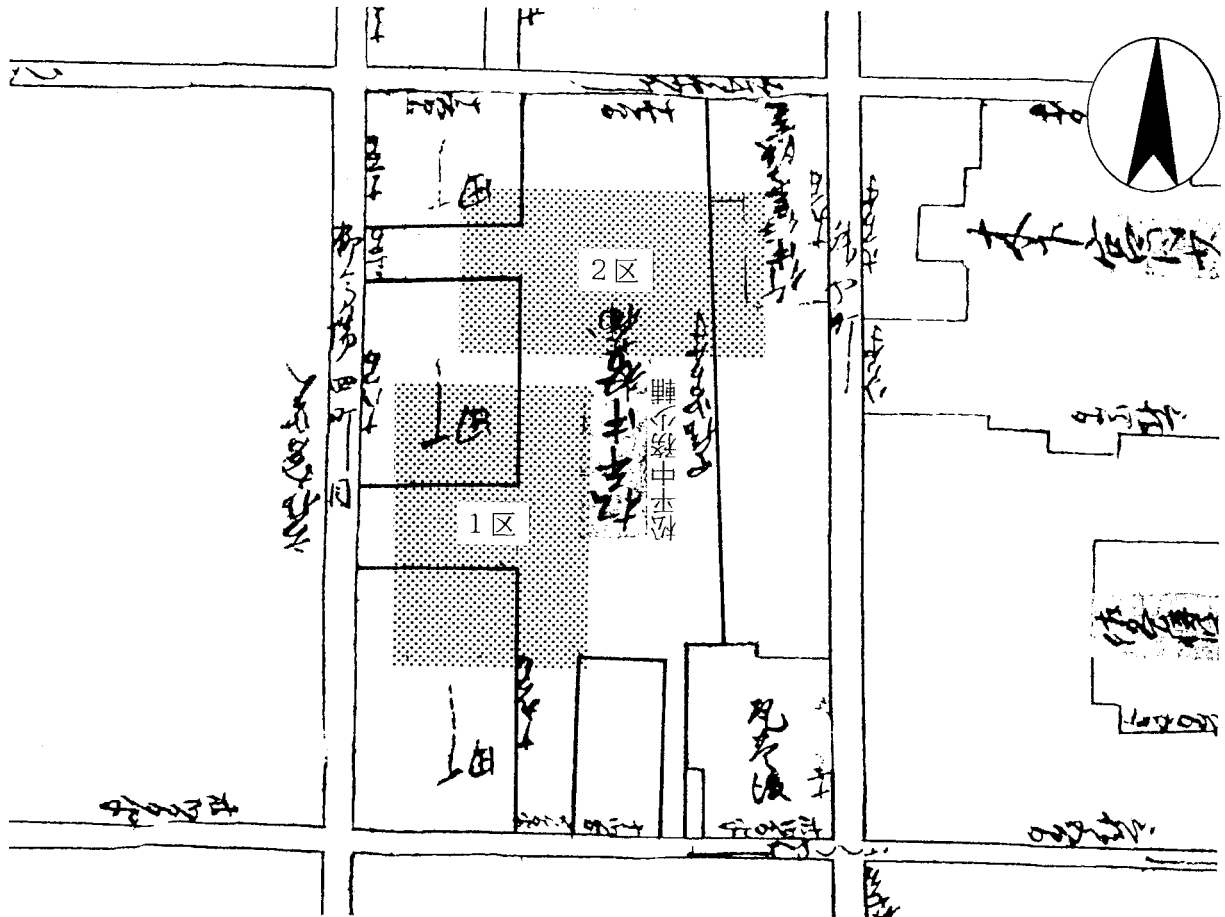


図2 調査区と『洛中絵図』の関係 (模式図)

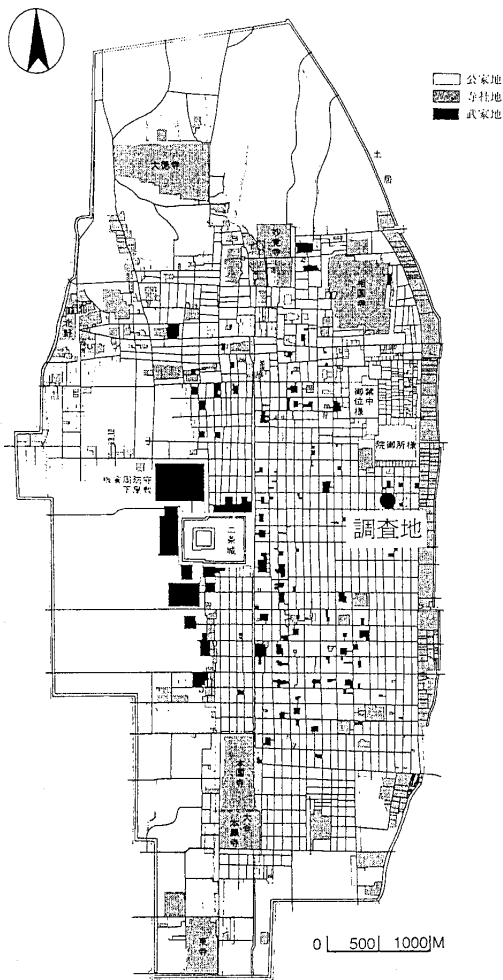


図5 京都市街復元図（江戸時代前期）
『日本都市史入門 I 空間』

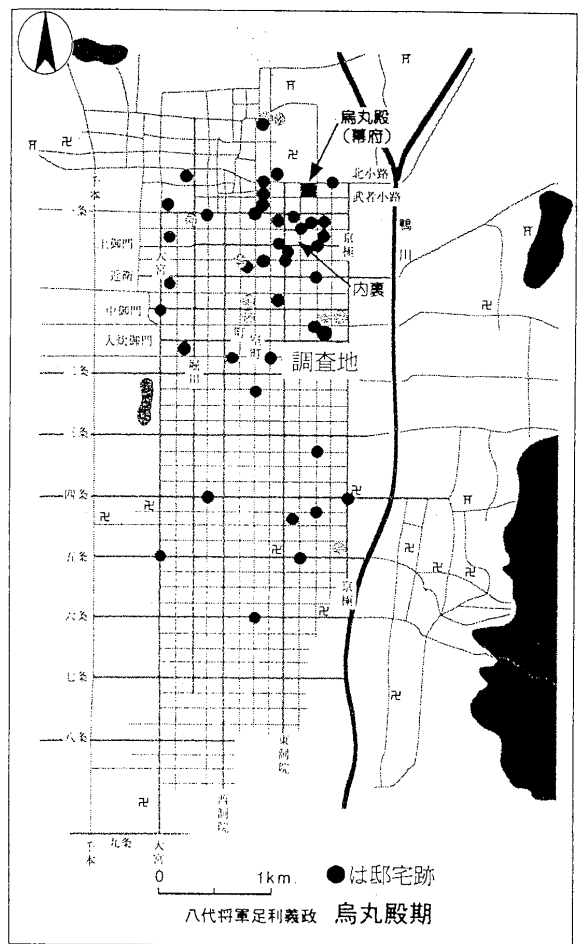


図4 京都市街復元図（室町時代中期）
田坂泰之「室町期京都の武家邸宅地について」
京都文化博物館『京都・激動の中世』

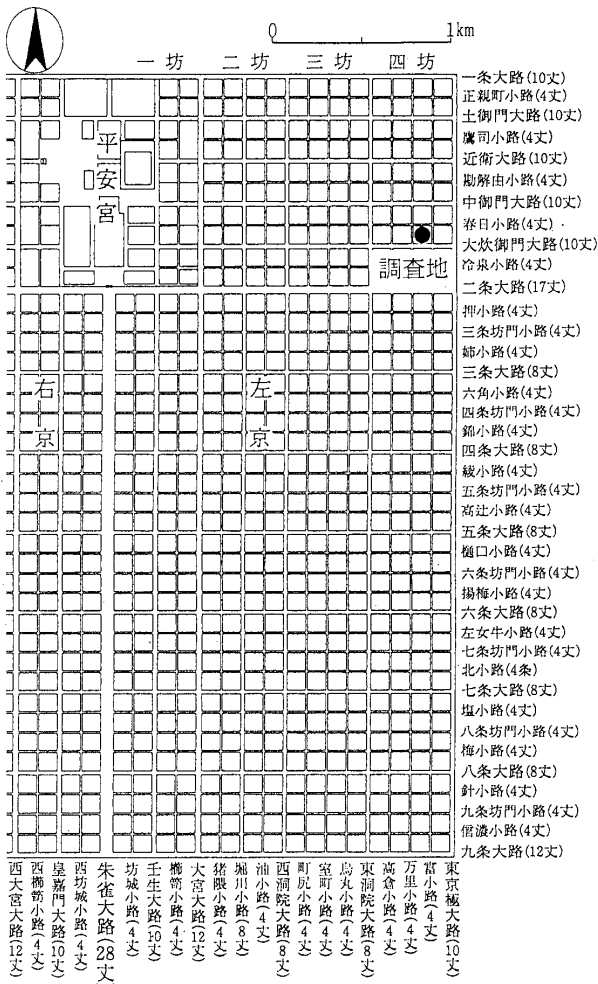
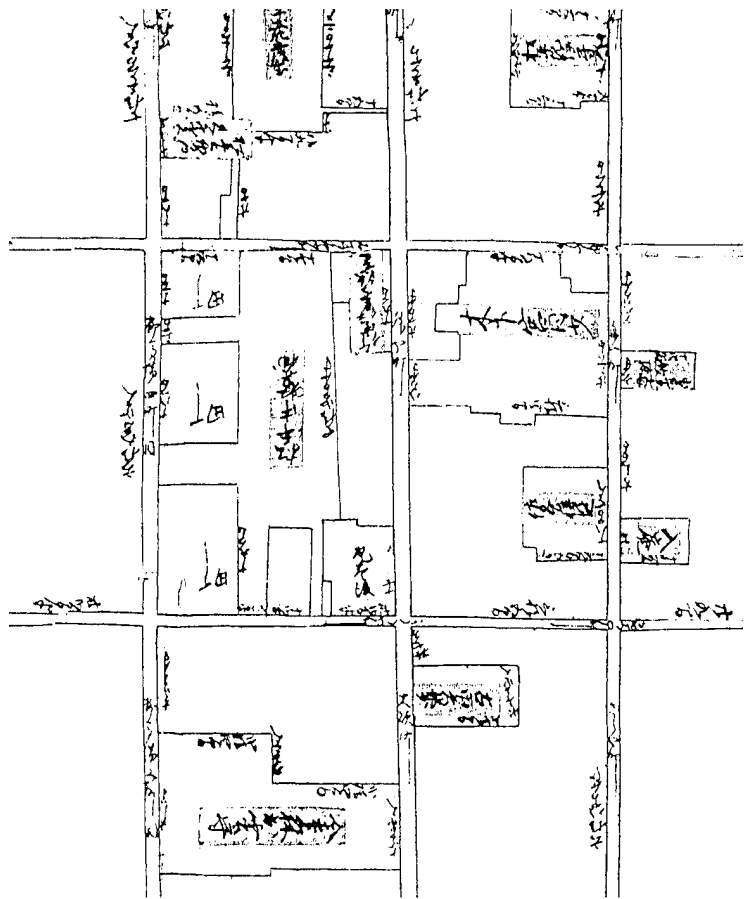


図3 平安京条坊復元図



『洛中絵図』に描かれた調査地周辺の様子

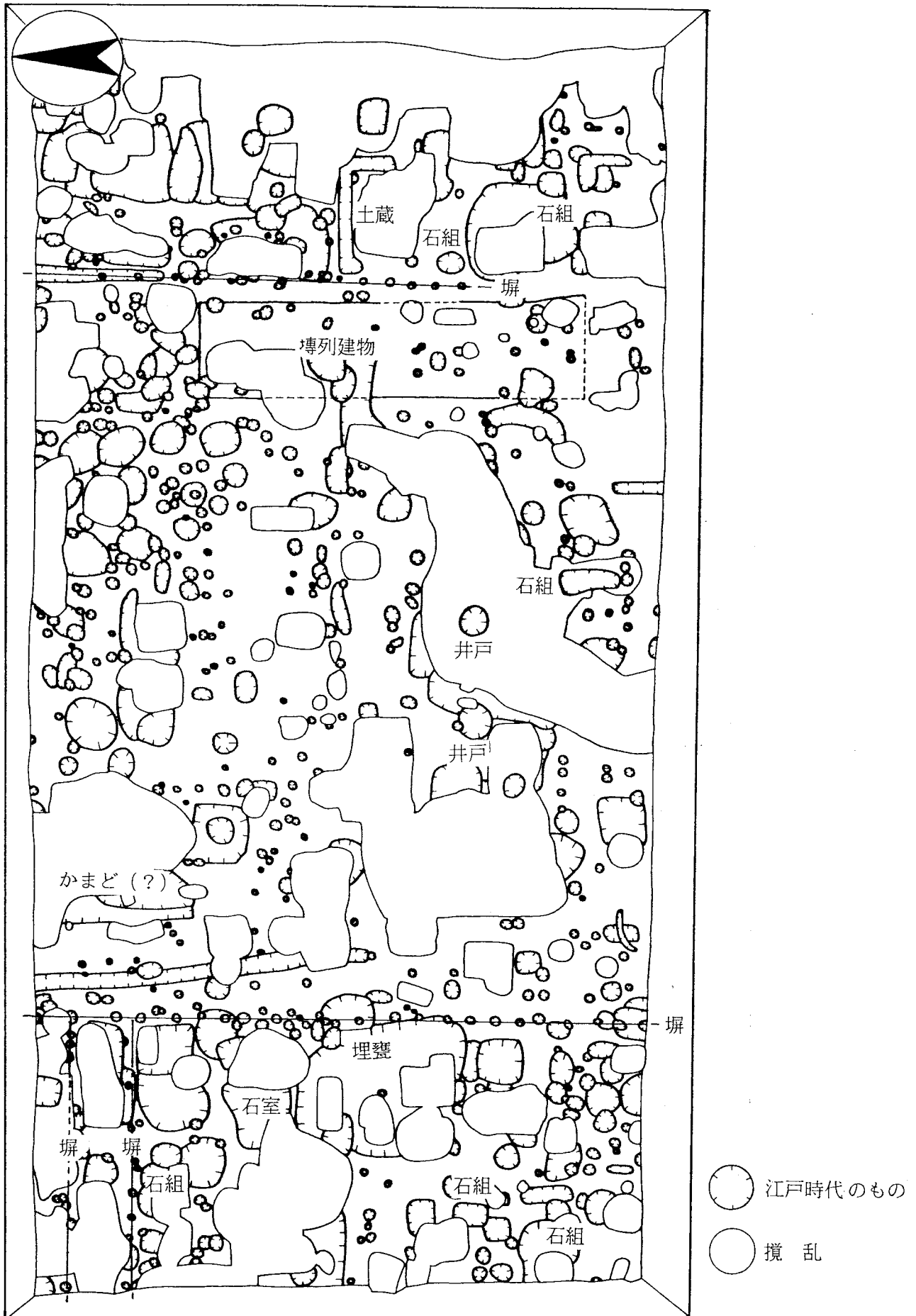
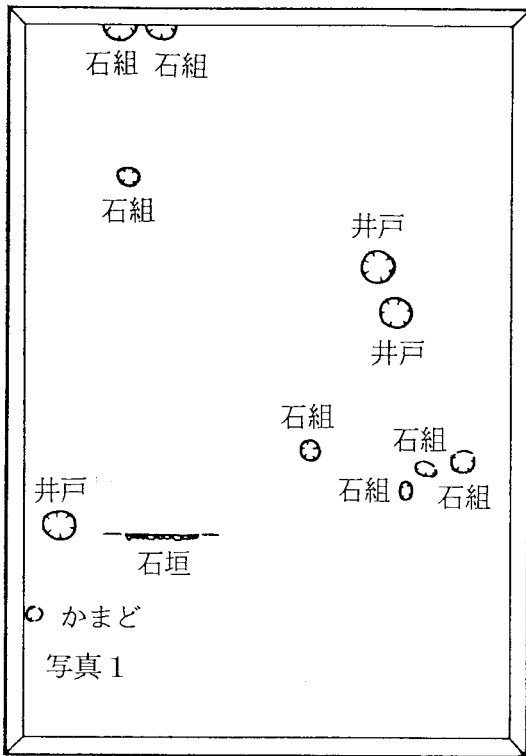
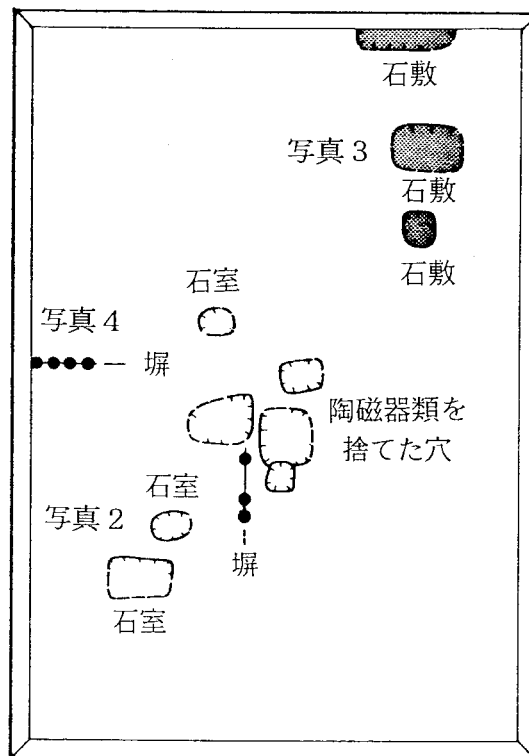


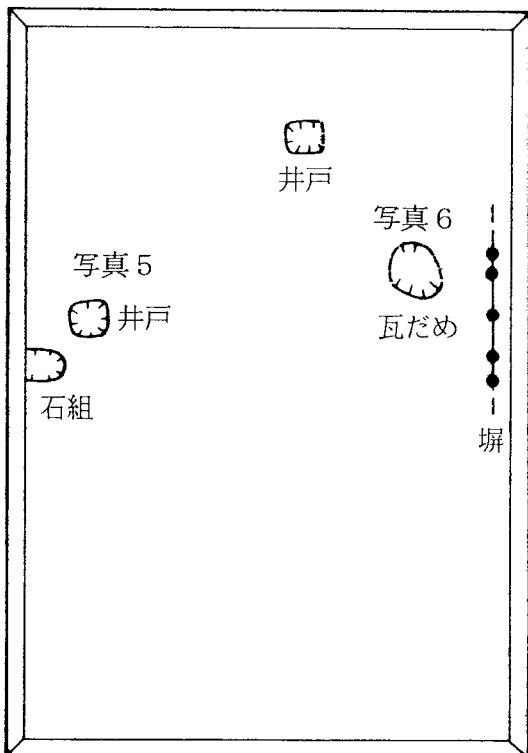
図6 2区第1面調査状況図(1/250)



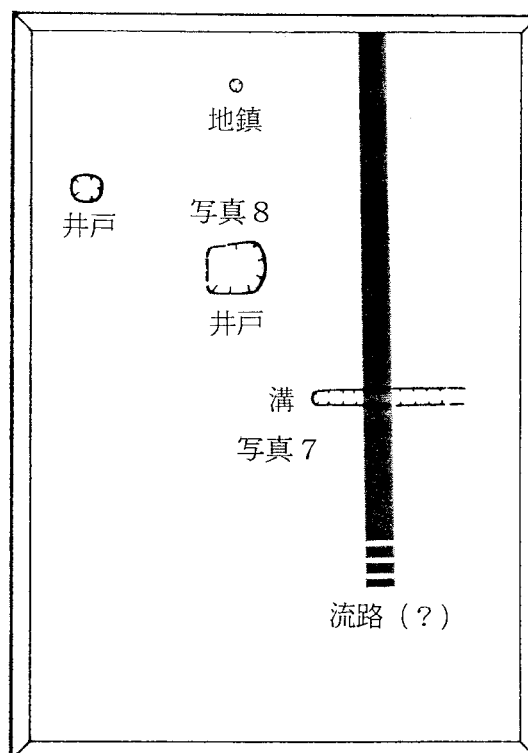
第1面 (江戸時代中期から後期)



第2面 (室町時代後半から江戸時代前期)



第3面 (平安時代後期から室町時代前半)



第4面 (飛鳥時代から平安時代中期)

図7 1区主要遺構模式図 (1/500)



写真1 1区第1面 かまど



写真2 1区第2面 石室



写真3 1区第2面 石敷



写真4 1区第2面 塀



写真5 1区第3面 井戸



写真6 1区第3面 瓦だめ



写真7 1区第4面 溝



写真8 1区第4面 井戸内土器出土状況